
CREATION

来栖真冬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

CREATION

【Nコード】

N0568BA

【作者名】

来栖真冬

【あらすじ】

高校1年生の日高未由は中学時代、2つ年上の先輩・宮坂夏生に告白するも、失恋した。その後、未由は宮坂を追いかけて、名門・私立鳥咲高等学校に入学する。しかし、既に宮坂には彼女がいた。そこで未由は復讐計画を実行するのだった。また、宮坂の親友・白河秋羽に宮坂が好きだった事実を知られてしまい……

プロローグ（前書き）

初投稿・初作品の初心者です。

誤字・脱字はそつと教えてくださると助かります。

文章力のなさは十分理解しておりますので、それでもいいという方はぜひ読んでみてください。

プロローグ

私にとって2年という間は大きすぎた。

世の中は不公平なことばかりだ。

同じ年に生まれていたら、変わっていたかもしれない。

こんな風に思うこともなかったかもしれない。

努力しても、生まれた時から恵まれている人に勝つことなんかできない。

だから、最初から同じ土台に立つ人間はとても少ない。

でも、そんなことを言っても、今更変えることなんか出来ない。

自分で運命を選ぶことなんか出来ないのだから。

私は神に見放されているんだろうか…

そう考えたこともあった。

でも今は神の存在すらも否定するようになった。

神を信じるよりも自分で動くしかない。

自分のために。

今から変えるしかない。

いや、変えるんじゃない。

創り出す。

これからの私の人生を。

中学生の時はこんな難しいことばかり考えてたっけ。
今はもうやめた。

でも気持ち的には、今も全然変わってない。

だから、行動する。

叶わなかったこの恋を、いつからか違う気持ちに変えてしまっ

た、

貴方を許さない。

絶対に。

「愛、それは復讐。」

プロローグ（後書き）

よければ1話を読んでみてください。

01 (前書き)

初投稿・初作品の初心者です。

誤字・脱字はそつと教えてくださると助かります。

文章力のなさは十分理解しておりますので、それでもいいという方はぜひ読んでみてください。

私は生徒会室に居た。

もう秋も終わりごろで、少しずつ寒くなってきた。

生徒会が新たな役員へ交代になる時期だ。

この私立鳥咲とりさき高等学校の生徒会は5月に生徒会役員を選出する。これは早くから生徒会に入ること、1年生も行事の中心となるようにという学校の方針だった。

1年生が生徒会に入れる定員は2名で、私はその一人だった。生徒会に入ると、結構目立つから本当は嫌だった。

でも、私が高校に入ってからからの目的を達成するには、生徒会に入るのが一番だった。

中学の時、私は学年で成績トップだった。だから、周りも私のことを生徒会に薦めてくれた。

なぜか「賢い」生徒会「みたいなイメージがついている。

もちろん、鳥咲の生徒会は賢い人たちの集まりだった。

賢いと言っても、本当に楽しい人たちばかりだ。

でも、この生徒会も、もうすぐ解散になる。

この半年間、私は一人の先輩のことをずっと見続けてきた。

入学してから、毎日あの人のことばかり考えていた。

最初はどんな人なのかと思っていただけ、学校ではかなり有名な生徒会長だった。

容姿端麗、成績優秀かつ性格も良い完璧な超人。

多分、この人を嫌いな人なんか世界中探してもいないんじゃないかと思う。

そんな生徒会長・佐倉先輩さくらを追いかけたくて、私は生徒会に入っ

た。

生徒会以外じゃ、佐倉先輩に会うことなんてほとんどない。だから生徒会が解散になれば、もう会えなくなる。

「未由^{みゆ}ちゃん、どうかした？」

ぼんやりしていたら、佐倉先輩が不意に話しかけてきた。

「あ、いえ、何でも…」

少しだけ間が空いて、

「・・・じゃあ、そろそろ帰ろっか。」

佐倉先輩は笑顔で言った。

私は返事をせずに鞆を持って、椅子の上から立ち上がった。

2人きりの生徒会室は静かで、立ち上がる時、椅子の引きずる音だけが響いた。

今日は書類整理のため、他の役員は途中で帰ってしまった。

というのも、佐倉先輩が残り自分でやると言ったからだだった。

本当は私も帰るはずだったけど、どうしても手伝いたいと言い、一緒に残った。

「今日はありがとう。」

窓の鍵を閉めながら、小さく微笑んだ。

「佐倉先輩は、無理しすぎなんですよ。もっと頼っていいのに…」

「大丈夫！私なんかが会長で、皆に迷惑かけてきたし・・・。」
少し困った顔をしていた。

「迷惑なんて思ったことないです。先輩がいたから、私、楽しかったです。半年間。」

半年間、ずっとこの人を見てきた。

「ありがとう。私も、未由ちゃんみたいな可愛い後輩がいてよかった。」

明るい笑顔で、本当に眩しかった。

私は、先輩の言葉に「彼女は本当に完璧だ」と感じることはしか出来なかった。

先輩ともっと違う形で出会っていたら、そう感じることはなかったかもしれない……。

窓から見た景色は夕日が私たちを強く照らす。

美しくも虚しい夕日の色は、私を無心にさせた。

いつも夕日を見るときは1人だった。

だから、突然来るであろうこの日のためにどうすべきなのか考えていた。

だけど、今日は先輩がいる。

だから言わなければならない。

半年間、考え抜いた計画を実行しないと……。

「佐倉先輩」

先輩の名前を呼んだ。

「何？」

佐倉先輩は振り返って言った。

いつもと何も変わらない優しい表情で。

「っ……っ」

あ……駄目だ。

次の言葉が声に出せなかった。
辛^{つら}かった。

「……すみません。先に帰ります。」

先輩と目も合わせずに、小さな声で言った。

「あ、うん。お疲れ様。」

心配そうな顔をしてくれた。

私はその表情もちゃんと見ずに、ただ走った。

この人がどれだけいい人なのか、知っていた。

私はこれからこの人を苦しめようとしているのか。

この人を変えてしまおうとしているのか。

自分の中に迷いがあった。

半年間抱えてきた思いよりも、彼女への罪悪感の方が勝ったのだ。

いつからこんなに弱くなっただろう……

私は目を閉じた。

中学から今までの自分を思い浮かべる。

毎日必死で勉強して、わざわざ鳥咲高校に入った理由。

目立つのが嫌だったのに、生徒会に入った意味。

そして何より、中学時代の忌まわしい出来事。

目を開いた私はもう、自分自身を止められなかった。
感情をコントロールできない。

・・・許さない。

好きだから、許さない。

02 (前書き)

誤字・脱字はそつと教えてくださると助かります。

文章力のなさは十分理解しておりますので、それでもいいという方はぜひ読んでみてください。

夜はずっと2年前の新聞を眺めていた。
この新聞が私のお守り。

【日和中バスケット部、全国大会優勝】

カーテンの隙間からこぼれる太陽の光がやけに眩しい。
いつもより起き上がるのが辛い。

時計を確認し、仕方なく立ち上がる。
現在6時5分。

いつもは7時の目覚ましで起きるが、なぜか今日は目が覚めた。
はぁ・・・。

大きいため息をつく。
自分のしなければならぬことが目の前にあるというのに、立ち止まってしまふ。

計画、計画と自分の失敗したことを考えてしまつと頭が痛い。

そんなことを思いながら、朝を過ごす。

でも今日は、きっと自分を変える日になるだろう。
二度と元に戻れなくなる。
それでもいい。
だから私は、動く。

いつも真面目に聞いていたはずの授業も耳に入らなかった。
何か考えようとしても、邪魔するものがある。
それは放課後まで続いた。

そして、いつも通り生徒会室に向かう。
いつも通り？

鼓動が早くなっていく。それと同時に足早になる。
心の中は焦りと緊張とおかしな気持ちだった。

いつの間にか生徒会室の前まで着いた。
呼吸を整えてから、扉を開ける。

「未由ちゃん！早いね。」

佐倉先輩さくらがいた。

優しい眼差しで、声をかけてくれた。

「早くないですよ。何か手伝いましょうか？」
少し緊張する。

「ん〜、じゃあ、一緒にこれ資料室に運んでくれる？」
机の上に山積みになったファイルやプリントを指して言った。

「分かりました。」

すぐに机の側に行ってファイルを持ち上げる。
先輩はプリントを持ち上げた。

そして、2人で生徒会室を出た。

資料室に入ったのは初めてだった。
いつもは鍵が閉められていて生徒は入ることができない。
資料室の中はとても狭くて、大きな棚が並んでいる。

「ごめんね。荷物運びに付き合わせちゃって…」

「いえ……。」

「あ、そのファイルは、こっちの棚。」
プリントを空いた棚に置いて、ファイルを半分片付けてくれた。

この人に同情なんかしない。
この人から笑顔を奪うことになっても。
この人を傷つけることになっても。

私は、冷静だった。
そして、1歩踏み出す。

「佐倉先輩」

いつもより声が低いのが、自分でも分かる。
同じ名前を呼んでいるのに、昨日とは全然違った。
揺らがない。
強い覚悟がある。

「何？」

先輩は明るい笑顔で振り返るが、その笑顔はすぐに消えた。
表情を曇らせる。

「先輩は・・・、悲しい人の気持ちが分かりますか・・・？」
先輩の方へ足を進める。
1歩ずつゆっくり。

「え・・・？」

驚いた表情で声をもらす。

「苦しくても、泣けない人の気持ちがかかりますか・・・？」

先輩の目の前で、まっすぐに先輩の目を見た。

「私は・・・」

困った表情で私から目をそらす。

きっと私が本気なんだと悟ったから、何も言えないでいるんだろ
う。

本当に良い人だから。

それでも、私は・・・

「分かる訳ないです・・・！先輩には・・・。」

握り締める手の痛みなんか気にならないくらい、体が熱くなる。
駄目だ。今は冷静でないと。

「ごめんなさい・・・。」

謝りながら、少しずつ足を後ろへ進める。

近づいてくる私に怯えている。

見たことがない。この人がこんな顔をするのは。

その瞬間、右側の棚からさっき片付けたファイルが落ちてくる。

「危ない・・・っ！」

私は咄嗟に先輩を庇った。

背中や頭にファイルの山が降って来た。

普通に・・・痛い。

先輩は仰向けになり、私はその上にいた。

「あ・・・ありがとう・・・」

遠慮がちに先輩は言う。

「今まで私が、貴方をどう思ってきたのか・・・分かりますか？」

先輩は首を横に2回振った。

その時から、私に対する怯えはなくなっている。

彼女の表情から、読み取ることが出来た。

先輩は優しすぎる。

私のことなんか何も知らないで、優しくするなんて。

この状態のまま、更に先輩に顔を近づける。

「先輩を、あの人に渡すわけにはいかない・・・」

開きつ放しになった資料室の扉も気にしなかった。
遠くから見ている男子生徒の姿も。

扉のすぐ側で見つめる宮坂夏生みやさか なつきも。

やっと今日からが本当の始まり。

私達の日常がどう変わってしまうのだろう。

それでも私は、自分が一番大切だから。

人の気持ちを犠牲にしても、自分のことを守りたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0568ba/>

CREATION

2012年1月6日10時46分発行